

姫たちの戦国

徳川秀忠の妻お江③

一龍斎貞花

講談師

徳川秀忠に嫁いだお江が産むのは女ばかり。見兼ねた家康は、倅に側女を勧めるものの、秀忠は女房が怖いのか、本当に愛していたのか断ります。しかし秀忠も男、女房の目を盗んでお女中に手をつけ男の子長丸を産ませたが1年余りで亡くなります。

慶長3年、豊臣秀吉が亡くなり、五大老筆頭家康と、五奉行の石田三成の対立が表面化。秀頼を補佐していた前田利家が亡くなるや、家康は反三成の福島正則はじめ豊臣恩顧の大名を抱き込み、再三上洛を促すも応じない上杉景勝討伐に出陣。景勝討伐に向かえば必ず三成挙兵するとの計算通りとなり、小山会議に於いて正則はじめ諸将三成との戦いを表明。

「秀忠、其方3万8千を率いて真田昌幸、幸村親子の信州上田城を攻略せよ」

真田家長男信之は徳川方につき、親子喧嘩のようにいわれたが、これはどちら

が負けても家を残すことが出来る家存続のための二分法で、他にも小出、田中、前田家もこうした二分して家を存続。

慶長5年9月15日、天下分け目の関ヶ原合戦。「秀忠はまだ参らぬか、遅い。長男信康が生きておれば60過ぎのわしが戦場へ出ることもなかったであろうに」家存続のためだったとはいえ、信長の命により優秀な長男を切腹させたことが家康悔まれてなりません。

秀忠は、上田城を攻めるもその都度幸村の策略に手痛い損害をこうむるばかり、城攻め、包囲を繰り返す遂にはあきらめ撤退と長い道草をくってしまった。

戦いは、小早川秀秋の裏切りもあり東軍の大勝利。三成が秀頼を先頭に押し立てていたならば秀吉恩顧の将たちは、弓引くことならず西軍へついたことだったのでしょうが、三成の戦下手、官僚的な冷たいやり方、武断派の正則や加藤清正等と対立も大きな原因、三成は六条河原で斬首。三成を信頼していた淀君は大ショック。

秀忠が、お江のもとへ戻るや、「お帰りになさいませ。関ヶ原へは遅れたそうですね、今後はこのようなことのないよう、お気をつけ下さいませ」かかあ天下にびしゃりとやられた秀忠でした。

家康将軍就任、お江は長男家光出産

「ナニッ、家康が将軍になると…。豊臣の政権は、秀頼はこれからどうなるの

じゃ」家康が征夷大將軍就任と聞くや淀君烈火の如く憤ります。その秀頼のもとへ千姫の輿入れ、お江は7歳の千姫を伴い伏見城へ。徳川を取り込もうと秀吉の決めた結婚であったが、今や逆の形で11歳と7歳の幼い夫婦誕生。

お江が4女初姫を出産するや、「私には子がおらん、是非養女に」と、姉お初の養女となった初姫は、後に京極高次の側室の子で長男忠高に嫁いでいます。次がまた女で5女和子（後水尾天皇の中宮）翌る慶長9年7月17日待望の長男竹千代、後の家光を出産。産まれるやすぐ「お福と申します。わが身命をとしましてご立派にお育てする覚悟にございます」何人もの候補の中から選ばれたのが、明智光秀の家老斎藤利三（としまつ）の娘お福、後の春日の局です。叔父信長を殺した光秀の重臣の娘、夫稲葉正成と離婚して乳母に。大納言家の奥方に奉公し礼儀作法を心得ているものの、疱瘡を患いあばたであったと申します。

「姉の淀君は、秀頼に自分の乳を飲ませ手ずから育て上げたのに、取り上げられてしまうとは」お江は悲しさ一杯。男子出生を報らせるや、家康は、後継者出生に大喜び。64歳の家康は、秀忠に將軍職をゆずり、20年前自ら築いた静岡駿府城を大改修しここに腰をすえ大御所として、徳川基盤確立に乗り出すのでございます。

お江は、竹千代に続いて国松、後の駿河大納言忠長を出産。今度は自分の手で

国松を育てます。竹千代は病弱、礼儀作法から言葉使いも弟の方が優れ、妻が手元で育て賢い国松を可愛がるのですから、父親の秀忠も自然慈しみます。

母親は、自分の側にいる従順な弟に家督を継がせたい。信長の母土田御前（とつたごぜん）も信長より弟信行を。伊達政宗の母義姫も疱瘡でみにくい政宗より弟小次郎をと、お江も同じでした。家督を継ぐのは賢い国松様ではないかと家臣も国松寄りになっていきます。後継者決定を誤るとお家騒動の元です。十分ご注意ください。

確固たる政権確立を図る家康

慶長16年、家康は秀頼に上洛を要求。益々盛んな家康に抗しきれず、秀頼は二条城において家康と対面。

久々秀頼と対面した家康は、誰をも魅了するであろう凜々（りんりん）しく成長した19才の秀頼を見て

「暫く見ぬうちに、これほどまでの男になっておろうとは。豊臣の旧臣は、秀頼に従うことになろう、これはのんびりしてはおられんぞ」と、腹を決めたのでございました。

徳川のため、秀忠のため豊臣を叩き潰す、それが家康の考えでした。後継者へのバトンタッチには、トップはこれほどの覚悟が必要ということでありましょう。次回最終回をお楽しみに、ポポンポン。